

部活動改善の教育経営的アプローチ

～指導者の専門性と非専門性に着目して～

所属コース 教育実践開発コース
氏名 忽那定範
指導教員 白松 賢 池田哲也

【概要】

本研究の目的は、競技の専門性と非専門性、人間形成に関わる教育の専門性と非専門性に着目して、部活動の教育経営的な在り方について検討することである。本研究では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う部活動顧問の教育的行為に関する分析と競技の非専門性に関する分析を行った。その結果、部活動顧問のコロナ禍における生徒の状況を掌握し新たな活動を行った取組があり、部活動という組織の重要性を再確認することができた。また、外部指導者が技術指導を行うことで生徒の満足度を上昇させるだけでなく、非専門の競技を担当する顧問自身の役割が明確化し、人間形成に軸足を置いた指導に徹することで、生徒と顧問相互に充実した活動となることを明らかにした。

キーワード 人間形成の場 教員の資質向上 外部指導者

1. 問題設定

愛媛県の運動部活動の在り方に関する方針では、部活動の意義を「学級や学年を離れた集団の中で、生徒たちの自発的・自主的な活動を基盤に、共通の目標に向かって、互いに認め合い、励まし合い、協力し合い、高め合いながら、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感を育むなど、生徒の多様な学びの場として教育的意義が大きい」とし、全国の中学校では 91.9%、高等学校では 81.0%の生徒が何らかの運動部や文化部に所属している（スポーツ庁「平成 29 年度運動部活動等に関する実態調査」p.94 より）。

しかし、近年、教員の超過勤務、体罰などの行き過ぎた指導、活動中の事故、平日の朝練習・放課後練習や土日休日の指導等による過剰負担など、部活動に関わる多くの問題が指摘されている。その中で、平成 30 年 3 月にスポーツ庁から『運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン』が公表され、現在では休日の確保や活動時間の短縮など新ガイドラインに則った中での活動に移行している。そして、部活動指導員の導入や地域総合型スポーツクラブとの連携など新たな部活動の形も示され、試行錯誤をしながら、今後の部活動の在り方を学校内だけでなく、地域と連携した改革を進めている。

教員の多忙化の一因に部活動の指導がある（添付資料 1：愛媛県県立学校教員勤務実態調査のまとめ）ことを否定するわけではないが、高等学校の教育活動で部活動は必要不可欠なものであり、部活動によって人間的にも成長し自信を得て、受験に立ち向かい社会へ巣立っていった生徒を多く見てきた。その一方で、愛媛県教育委員会が作成した運動部活動運営ガイドでは、「部活動は、学級や学年を離れ、生徒と密接に交流できる重要な場である。（中略）授業とは異なる人間関係や生徒理解を深めることができる。」と記し、部活動

は教師にとっても生徒との関係を構築でき、生徒理解が深まる重要な機会であるという側面を示唆している。そこで本研究は、競技の専門性と非専門性、人間形成に関わる教育の専門性と非専門性に着目して、実践と分析を行うこととした。

2. 先行研究の検討

1) 部活動に関する研究

部活動に関わる研究は多角的な視点で進められている。ここでは、本研究に関わる部活動の学校生活への影響、非専門顧問の苦悩、指導方法の改善についてまとめた。

白松（1997）は、学校の経営戦略における部活動の位置づけや有効性を考察して、生徒の学校生活に与える部活動の効果を明らかにした。高い学業成績を持った生徒が部活動へ参加し、現在もその学業成績を維持していることなど、部活動参加者は、非参加者よりも学校に適応しており、学校生活への意欲の促進や学校内での良好な人間関係の相互作用の結果、部活動参加者は学校へ適応的な価値や行動様式を身につけていることを述べている。

中澤（2017）は制度的な問題に焦点を当て、特に部活動顧問である教師の労働問題を提起している。日本体育協会指導者育成専門委員会編（2014）のデータから運動部活動の顧問教師の半分近くが、スポーツの知識や経験がない中で、肉体的・精神的に負担を抱えながら部活動に従事している実態が明らかになったと述べている。また、中澤（2012）では、運動部活動に消極的な顧問教師に焦点を当てた分析を試みており、教師－生徒関係については、それが教育実践に有効であるという認識がありながらも、消極的な顧問教師は苦悩と葛藤を抱えながら、運動部活動にかかわり続けざるを得ないことも指摘している。その問題点を解決する策として、石原（2012）は外部指導者の活用において、「生徒の満足度の観点からだけでなく、教員の負担感の観点からも有効である。外部指導者の協力が得られることで、生徒にとっては高い技術指導を得ることができ、満足度が向上する」と述べており、愛媛県が外部指導者の活用に力を入れていることを報告している。

神谷（2014）では、勝利至上主義の問題を「勝つこと」が「至上」の目的となっていることを批判し、指導方法の改善を促している。教科指導では「教材『で』何を教えるのか」（教科内容）を重視してきた歴史があるが、運動部活動も種目「を」教えること以上に、種目「で」何を体験させるのかに論点を移していく必要があるだろうと述べ、社会の主人公を形成する人間形成の場に重きを置いた指導への変革を提言している。

2) 部活動指導に関わる高校教育の課題

部活動は教育機能を充実させるために極めて重要であるということは、部活動が制度化されてきた歴史的経緯の中からもうかがえる。しかし一方で、近年の部活動を担う教員組織の問題も指摘されている。それを愛媛県内のデータなどで確認してみたい。

① 性別・年齢別で見る「主顧問」を担当している割合（単位％、女性 n=1343 人、男性 n=2215 人）

	25 歳以下	26 歳～30 歳	31 歳～40 歳	41 歳～50 歳	51 歳～60 歳
男性	63.0	77.0	77.1	64.6	48.5
女性	42.2	58.8	41.6	38.0	32.6

出典）ベネッセ教育総合研究所【第4回】中学校教員の部活動指導の実態と意識から今後の部活動のあり方について考える より

性別・年齢別で異なる理由は、第一に女性教員が結婚・出産を経て家事・育児に男性教

員よりも時間を割くようになること、第二に、年齢とともに他の校務分掌で責任の重い役職に就き、その職務に時間を割くようになることが考えられる。そのため、主顧問を担当できる教員は限られており、若手・中堅の男性教員が主顧問を担当する割合が多くなり、競技経験のない部活動を担当するケースが増えているのが現状である。

② 愛媛県の県立学校の年齢別教諭人数（令和元年）

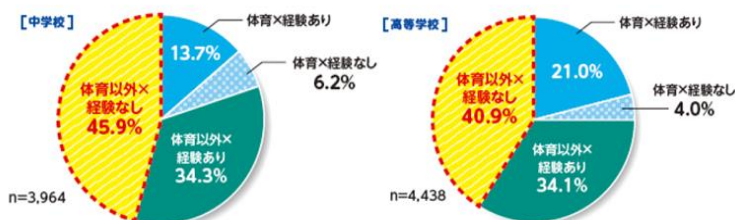
（単位：人）

年齢別	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	合計
男性	21	114	139	179	255	218	299	286	1511
女性	31	96	111	126	198	178	150	87	977
合計	52	210	250	305	453	396	449	373	2488
男性割合	40.4%	54.3%	55.6%	58.7%	56.3%	55.1%	66.6%	76.7%	60.7%

年齢層別に見ると、若い世代の教員数が少ないことは明らかだが、2) ①のように運動部活動の主顧問を担ってきた若い世代の男性教員の割合が激減していることは、今後、部活動を運営していく上で、大きな問題になると考えられる。

③ 運動部活動を担当する教員の競技経験。

日本体育協会がまとめた『学校運動部活動指導者の実態に関する調査』（平成 26 年 7 月）の中で、担当教科と現在担当している部活動の過去の競技経験に着目すると、「担当教科が保健体育ではない」かつ「現在担当している部活動の競技経験なし」の教員は、中学校で 45.9%，高等学校で 40.9% となっており、半数近くの部活動で未経験の教師が顧問を務めている。



出典) 公益財団法人日本体育協会 学校運動部活動指導者の実態に関する調査 (平成 26 年 7 月)より

3. 実践と分析

先行研究と部活動を取り巻く現状から、本研究は2つの実践を行った。1つは部活動を人間形成の場と捉え、コロナ禍でも可能な方法を模索し、特徴ある活動を実施した部活動の調査と、2つ目は非専門の顧問が担当する部活動に外部指導者を置くことによって、顧問の負担軽減などの変化、生徒の成長を記録しその変化を検証した。

1) 部活動を基盤とした教員と生徒の遠隔交流活動の促進

新型コロナウイルスのため4月14日から5月10日が臨時休業、5月11日から5月21日が分散登校となった。未曾有の状況の中、学校内でも混乱が生じていたため、ホームルームでは課題提示型が教員と生徒との交流の中心になっていた。一方、部活動では組織をうまく活用し、生徒との交流や生徒間の相互交流を促進した実践が生まれた。生徒の気持ちを繋ぎ止め、生徒が成長できるチャンスだと捉えた特徴のある取り組みを紹介する。

サッカー部では、週に1度はZoomを利用したオンラインのフィジカルトレーニングを

実践した。Zoomであれば生徒の様子を確認しながら活動できるため、休校中の貴重なコミュニケーションの場となっていた。また、知識構成型ジグソー法の手法で勉強会を行った。全部員を各学年混合の6班（1班10名程度）に編成し、健康管理・トレーニング部門、サッカー理解・分析部門、動画・画像部門、スマホ管理部門、勉強時間管理部門、親孝行部門の6つの部門に分け勉強会を実施、その情報を班内で発表する形を取った。そして、それぞれの班内で出た意見を顧問に報告し、全体共有する形で部内の様々な意見をまとめた。

野球部では、ロイロノートで朝の会・ルールに関するクイズ・1日の記録を発信し解答・提出する時間を決めて実施した。予想以上に長引いた休校期間の中でも、生活リズムを崩さずに自分自身で考えた活動ができていた。また、時間厳守し丁寧に資料を作って提出する生徒、時間管理ができず様々な面でルーズな生徒など、グラウンドだけでは見ることができない生徒の性格を知ることができた。保護者からも好評で、「朝の会の言葉を見て朝の食事の会話が増えた」や「野球クイズでは父親や兄弟と協議しながら答えていた」など、この活動をきっかけに家族の繋がりが深まったことへの感謝の言葉もいただいた。

実施後の生徒の感想を見ると、休校中でも生活が乱れなかったことやこの時期だからこそできた活動に充実感を感じていた。その中でも入学後すぐに休校になってしまった1年生の不安も同級生や先輩のことを知る絶好の機会になり、開校後、スムーズに活動に入る準備ができた活動になっていた。

【生徒の感想】

- ・先輩達がどんな目標や、考え方で野球に取り組んでいるかという思いがわかったので、高校野球をスタートする上で参考になり、練習に入って行きやすかったと思う。
- ・自分の精一杯書いた文章でも、2・3年生に比べるとレベルが低い事がわかり、中学生と高校生の差をととても感じました。みんなの解答なども見ることができ、どんな先輩たちがいるのか何となくわかって簡単な自己紹介のようで、いざ野球が始まったとき入りやすかったと思います。
- ・野球部に知り合いが1人もいなかったので心細かったけれどロイロノートの中で同じ活動が出来ているというだけで、少し安心感を持つことが出来ました。また知識も増え自分にとってはとても良いものでした。実際に部活動が開始し顔を知らない先輩たちと練習するのは少し怖かったけれどロイロノートを通じて名前を知ることができていたので頑張ることが出来ました。
- ・みんながどういう生活リズムで過ごしているのかが分かり、自分の生活リズムの乱れを実感し、直すことができました。そして、学校が始まった時に、いつもと変わらずの良いスタートができました。
- ・普段はライバルであるチームメイトとグラウンドで競っていたのがコロナの影響で出来なくなっていたのを一日の行動記録をチームで共有することでどれだけ頑張っているのかが分かり、勉強時間や自主練の時間をより増やすことができました。個人としてだけでなくチーム全体としても、お互いの考えが知れて人間的に成長をすることができたと思います。

2) 外部指導者の配置

置籍校の女子X部顧問より部活動の運営に関する相談を受けていた。競技経験がないため技術指導することができないことに加え、女子だけの集団を指導することの難しさから次第に活動の場所から遠ざかっていくことが多くなっていた。以前は部活動にも熱心に取り組んでいた教員だったため、その原因が技術指導をできないことの負い目からくるものだと判断した。そこで、4月に県に外部指導者の申し込みを行い、今回は近隣の大学院に

通う教師を目指す学生に外部指導をお願いした。これまでの外部指導者は元教員や元保護者など競技経験のある人が務めることが多いが、良好な立地条件を生かし、卒業生ではない新規の大学生を外部指導者として採用する新たな試みである。

※ 外部指導者プロフィール

愛媛大学教職大学院2回生。高校から競技を始め、大学でも継続して活動した。また、大学時代から地域の小学生対象のスクールで指導を行っている。

① 顧問へのインタビュー（第1回：4月当初，第2回：12月下旬）

外部指導者の配置により、どのような変化が表れるかを明らかにするため、外部指導者の導入前と導入後の2時点で顧問教師を対象にインタビューを実施した。

1年目は競技経験のある部を担当し、技術的な指導もでき充実した日々であった。2年目から、専門とする体育教員の異動により全く未経験の女子X部を担当することとなった。活動は週6日程度で練習試合は月に1回する程度だった。苦痛を感じていた内容としては、技術的な指導が出来ないため、踏み込めず、ミスしている理由も分からないためアドバイスもできなかった。居ても意味がないと感じるようになっていき、平日は最初と最後に顔を出す程度で徐々に足が遠のいた。また、登録の方法や物品の購入など大会に向けての準備が分からないため、生徒任せになるなど困難を感じる場面が多くなると共に、保護者からのクレームが増えたことなど1年間の苦労が垣間見られた。

外部指導者が指導を始めて半年後の12月のインタビューでは、「練習メニューの幅が増えたので、互いに『あれがしたい、これがしたい』という生徒間の議論も生じるようになった。これまでの指導では、ほぼ毎日同じ練習の繰り返しで、日常にあまり変化を出せず、ただ何となくこなしていた練習に“色”が付き、部全体に活気が生まれた」など、生徒の具体的な成長を語った。活動に参加し、生徒を見ているからこそ語られる言葉が多く、その後、「競技に関する知識が身についた。外部指導者がいない時でも、わずかではあるが、技術的な指導ができるようになったのが一番大きい」など、顧問自身の変化も語るようになった。そして、「生徒とのコミュニケーションが増え、生徒指導に関する教育がしっかりとできるようになった」と部活指導への充実感を語る。昨年度のような精神的な負担は解消され、部活動の意義も再確認できたと締めくくった。

② 外部指導者へのインタビュー

「指導者と1対1とのラリーの場を作ることで、一つ一つのショットのポイントを伝えられるなど細かな指導ができたり、個々のレベルに応じた配球や強度を高めたり変化をつけた指導ができるため成長が早いと感じた。また、技能向上のための質問をしたり、練習内での悩みや要望を聞いてきたりする生徒が出てきた」などと、生徒の技術・意欲の向上が見られ、専門性を生かした活動の充実感を語った。

一方、「生徒の班分けが難しかった。練習場所が限られているため2班に分ける時に、部活動への意識の差を考慮してレベル別で分けたかったが、生徒同士の間人間関係が把握できていなかったため、1・2年生で分けて練習を組んだ。そのため、生徒全員が満足のいく部活動にする事が難しかった」など、生徒の間人間関係を把握できておらず、顧問との情報共有が不十分であったと課題も語った。

③ 生徒へのアンケートの実施（第1回：6月上旬，第2回12月中旬）

コロナ禍で休校だったため，当初の計画より遅れたが，学校が再開され部活動が始まる前に今回の趣旨説明を行い，第1回目のアンケート調査を実施した。第2回目は外部指導が始まり半年が経過し，大きな大会が終了した時期に実施した。昨年度と今年度の状況を比較するため，2年生部員にターゲットを絞り，アンケート及びインタビューを実施した。以下のデータは，2年生10名以下の平均値のデータである。

【現在の部活動の満足度】	1回目	2回目	変化
指導者（外部指導者も含む）	1.00	2.13	1.13
練習方法	1.88	2.25	0.38
部活動全体	2.25	2.25	0.00
部活動と生活とのバランス	2.25	2.13	-0.13
保護者や地域の協力	2.88	2.00	-0.88

（満足：3，どちらともいえない：2，不満：1）

【部活動の「現状」について】	1回目	2回目	変化
外部指導者の協力がある	1.00	2.83	1.83
部員が自主的に活動する	1.00	2.33	1.33
技術の差に応じて，できる部員がどんどん活躍する場がある	1.63	2.67	1.04
活動「目標」がはっきり決まっている	2.50	2.83	0.33
顧問の先生に知識や技術の指導力がある	1.00	1.33	0.33
部が楽しい活動である	2.75	3.00	0.25
技術の差に関係なく，部員全員が活躍できる場がある	2.38	2.50	0.13
部員の個性が尊重されている	2.50	2.50	0.00
顧問の先生は部活動に出席する	1.50	1.33	-0.17
勉強と両立できる	2.50	2.00	-0.50
練習時間が十分である	2.75	1.00	-1.75

（できている：3，どちらともいえない：2，できていない：1）

第1回目のアンケート結果では，顧問に対する評価が著しく低いことも問題であるが，部活動の現状についての「部員が自主的に活動する」に対して全員の評価が「できていない」と答えており，部活動の本質の部分まで崩れていた。また，技術面だけでなく顧問と生徒のコミュニケーション不足と捉えることができる結果にもなっている。これを，顧問と外部指導者が情報共有し今後の指導の改善に生かしてもらった。

2回目のアンケート結果を1回目と比較すると，部活動に対する満足度では，外部指導者も含む指導者（+1.13ポイント），練習方法（+0.38ポイント）と指導に関する内容が上昇していた。また，部活動の「現状」について高評価へと変化した項目が，外部指導者の協力がある（+1.83ポイント），部員が自主的に活動する（+1.33ポイント），技術の差に応じてできる部員がどんどん活躍する場がある（+1.04ポイント）であり，外部指導者の個々のレベルに応じた指導から前向きな活動に変化したことがうかがえる。また，「練習時間が十分である」がマイナス評価になったことも，生徒の部活動に対する前向きな姿勢の表れと捉えることができる。外部指導者によって専門的な指導を受けられるようになり，もっと練習したいという気持ちになった表れだと考えられる。

④ 生徒へのインタビューの実施（第2回のアンケート実施後の12月中旬）

興味深かったのが、顧問の教員の変化を生徒自身が感じていることである。「外部指導者が来られて先生が積極的になり、球出しなどの技術指導を行うなど自分たちへの関わり合いが増えただけでなく、他校の先生や生徒と話をしている姿を目にするようになった」や「実践不足を感じ、練習試合も選手から増やしてもらえようと思ったところ、顧問も積極的に他校と連絡を取りあい、数が増えてきた」と語り、生徒とのコミュニケーションが増え、充実した活動に変化していることを感じた。そして、「大会での敗退から課題をはっきり示してくれることにより、普段の練習の意識が高まった」や「その場その場ですぐ的確なアドバイスがもらえることがうれしい」など、外部指導者からの技術指導にも満足している声が多かった。

また、「練習開始までの行動を早くするなど、少しでも活動する時間を確保するように、それぞれが動けるようになりたい」や「活動時間が短いため、基本的な練習が主になっている。実践的な練習まで指導していただき、アドバイスをいただきたい」など、さらなる高みを目指した言葉も出るなど、今後の具体的な課題も語れるようになった。

5. 結語

コロナ禍において、生徒と連絡を取り合い新たな活動を模索した部活動顧問は、不安な気持ちを少しでも軽減させ、この期間を成長できるチャンスと捉えて行動に移した。このように動けたのは、以前から専門的な指導を行いつつ生徒に寄り添うことで、緊急時でも生徒の気持ちを掌握できたからであろう。部活動の組織が、人間形成の側面において学校教育に必要不可欠なものであるとともに、生徒の現状を理解し即効性のある行動を取ることができる上でも重要なパーツになっていることを証明できた例である。

また、非専門の顧問が担当する部活動で外部指導者による指導が開始された場合では、生徒の技術向上だけでなく、外部指導者が技術指導を担うことで、顧問自身の役割がはっきりとし、積極的に関わるようになり、コミュニケーションが増え生徒理解に努める姿から顧問の資質向上も見られた。インタビュー内容やアンケート調査で「部が楽しい活動である」と全員が肯定し、「技術の差に応じてできる部員がどんどん活躍する場がある」の項目が改善されたことなどから、個々の具体的なスモールステップの課題を把握し指導することで、生徒の自己肯定感が高まり有意義な活動になっているといえる。

しかし、このような効果が認められながらも採用数が増加しなかったのは、財源や人材の確保などが要因だ(添付資料3:平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書p.88)。特に人材確保は、都市部においては一般企業が人材バンクを集約し活動しているようだが、地方ではその役目を各自治体の教育委員会が担っているため、都市部の一般企業が抱える人材の数とは比にならない少数で、結局は外部指導者を必要とする学校が独自で探すことになり、申請が困難な状態であった。この打開策として、松山市教育委員会は愛媛大学教職支援ルームを窓口として、運動部活動外部指導者を公募している。教職を目指す愛媛大学生(ただし2回生以上・大学院生含む)を対象とし、派遣依頼のあった中学校名・部活動名・求める人材などの一覧を公表、申し込んだ学生に対し教育委員会がガイダンスを行い、派遣先となる中学校で面接を実施、外部指導者としての採用が決定する。教員の志望者数が年々減少している中、将来、教職を目指す学生の勉強の場にもなり、得意分野の指導により、教育の面白さや楽しさ、難しさを感じる良いチャンスになると考えられる。大

学近辺の地域はそのメリットを生かして、この松山市の取組を参考に取り入れていくべきだと感じた。

愛媛県内においても、生徒引率などが可能な部活動指導員の採用や、地域総合型スポーツクラブとの連携など、新しい部活動の形を探っている（添付資料4参照）。各地域で大変有意義な活動が進められ、生徒の満足度、顧問の負担軽減の一助になっていた。しかし、部活動指導員にも財源の問題があるため採用数に限りがあり、今以上に広がる気配はない。一方、総合型地域スポーツクラブでは愛媛県下にある32クラブのうち、中学校の部活動と連携を取って活動しているのは数クラブに留まっているのが現実である。今後も活動を継続するため各々の形にあった方法を選ぶべきだが、選択肢が現状見当たらない。そのため、早急に人材確保のシステムを構築し、本研究のような外部指導者に技術練習を任せ、それ以外の部分を顧問が担当する形を取ることが、現状では有効な方法である。結果、非専門の顧問も生徒の人的成長に主眼を置いた指導が可能となり、部活動が有意義な活動として継続されていくと考える。

引用・参考文献

石原 剛(2012).運動部活動がもたらす効用の要因分析 ―愛媛県の高等学校を対象として―
― 政策研究大学院大学.

愛媛県教育委員会 愛媛県の運動部活動の在り方に関する方針(平成30年6月)

https://ehime-c.esnet.ed.jp/hosupo/gakkou_taiiku/H30_bukatudou_kaitei/300831_bukatudou_kaitei.pdf (最終アクセス日 2021年1月6日)

愛媛県教育委員会 運動部活動運営ガイド (平成27年3月改定)

<https://ehime-c.esnet.ed.jp/hosupo/bukatuguid/> (最終アクセス日 2021年1月6日)

愛媛県教育委員会 平成30年度愛媛県県立学校教員勤務実態調査 (令和元年7月)

<https://ehime-c.esnet.ed.jp/koukou/kyousyokuin/30kinmujittai.pdf> (最終アクセス日 2021年1月6日)

神谷 拓(2014). 運動部活動の制度史と今後の展望 体育科教育学研究 30巻1号 75-80.

白松 賢(1997). 高等学校における部活動の効果に関する研究―学校の経営戦略の一視覚―
― 日本教育経営学会紀要 39号 74-88.

スポーツ庁 平成29年度運動部活動等に関する実態調査報告書 (平成30年3月)

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/afielddfile/2018/06/12/1403173_2.pdf (最終アクセス日 2021年1月6日)

スポーツ庁 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン (平成30年3月)

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afielddfile/2018/03/19/1402624_1.pdf (最終アクセス日 2021年1月6日)

中澤篤史(2017). 部活動顧問教師の労働問題 日本労働研究雑誌 No.688 85-94

中澤篤史(2012). 学校運動部活動への教師のかかわりに関する記述的研究―消極的な顧問教師が離脱しない/できない理由と文脈の考察― 一橋大学スポーツ研究 31 29-38.

日本体育協会 学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書 (平成26年7月)

<https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/katsudousuishin/doc/houkokusho.pdf>
(最終アクセス日 2021年1月6日)

添付資料 1 勤務時間の調査

平成 30 年度愛媛県立学校教員勤務実態調査が行われ、令和元年 7 月に公開された。調査対象は、高等学校 9 校、中等教育学校 1 校、特別支援学校 2 校に勤務する教員で、調査期間は 11 月の通常の教育活動を行う連続する 7 日間である。

① 教諭の 1 週間当たりの校内勤務時間合計（単位：上段は時間，下段は%）

40 未満	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90 以上
0.3	10.3	24.6	30.3	22.1	9.5	2.8

② 平日の教諭の業務内容別の校内勤務時間（1 日当たり）

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
業務内容	授業(主担当)	授業準備	学校経営	部活動	学習指導
業務時間	2:48	1:56	1:09	0:55	0:22

③ 土日の教諭の業務内容別の校内勤務時間（1 日当たり）

	1 位	2 位	2 位	4 位	5 位
業務内容	部活動	学校経営	成績処理	授業準備	学習指導
業務時間	2:33	0:10	0:10	0:08	0:07

週 55～60 時間以上の時間外労働は、脳や心臓疾患のリスクを通常の 2～3 倍に高めるとされている。また、男性は 60 時間、女性は 45 時間の時間外労働時間を超えると、過労死の危険性が高まるとも報告されている。この結果を照らし合わせると、約 2/3 の教員が危険な域に達していることがわかる。また、土日の部活動の時間は 2 時間 33 分と予想より少なく感じるが、これは全教員の平均であることを考慮すると、部活動の顧問を担っている教員の時間的負担は大きい。しかし、これを解決するために、部活動を地域に丸投げしても地域の人々の協力は得られないため、有効な手立てにはならず活動はストップしてしまう。そうなれば子どもたちが被害者になってしまい、教育的空白を生んでしまう。そのためにも、議論を深めながら改革を進めていくべきであると考え。

添付資料 2 部活動を人間形成の場と捉えた活動(休校中プロジェクトの紹介)

野球部：ロイロノートで朝の会、ルールに関するクイズ、1 日の記録の提出

<p><朝の会> 著名人の言葉を紹介し、感じたことを自分の言葉でまとめて提出。7:30 にメッセージを送り、提出期限を 8:30 に決めて行う。定時起床も一つの目的である。</p>
<p><野球クイズ> 野球の細かいルールをクイズにして 15:00 に配信。提出期限を 16:30 に決め、時間になるとクイズの答えや解説、関連する YouTube などの動画紹介を行う。保護者と連絡を取ると、夕方は家族がいないことが多く乱れた生活をしていて困っているとの情報から、当初は昼の時間にしていたが、この時間帯に変更した。</p>
<p><1 日の反省と明日の予定> 寝る前に生徒手帳の 1 日の記録のページに、その日やったことの記録と次の日のやることリストを書いて提出。繕って書いて出すことも可能だが、1 日の反省と次の日の計画を立てて PDCA サイクルが行える大人になることを目的としていると説明してスタートしたため、有効だったと思われる。予想以上に長引いた休校期間の中でも、生活リズムを崩さずに自分自身で考えた活動ができていた。</p>

「野球クイズ」「1 日の記録」は共有して全員が見て刺激が受けられるようにした。朝の会の「今日の言葉」の感想は、率直な意見を知りたかったため、一部の紹介のみにした。

添付資料3 効果が認められながらも採用が増えてこなかった理由

平成 29 年度運動部活動等に関する実態調査報告書の教員対象の質問項目中で、「自身が主担当の顧問である部活動に外部指導者を活用できない主な理由は何ですか（問 30-4）」の結果が以下の通りである。該当する 3 つ番号を選ぶ回答で、中学校・高等学校ともに多かった項目が、「予算が確保できないため」と「求める人材が見当たらないため」が多い結果となっている。

	中学校顧問	高等学校顧問
予算が確保できないため	25.6	39.3
求める人材が見当たらないため	43.5	37.2
外部指導者には活動中の事故等における責任が負わせられないため	20.6	21.1
外部指導者では生徒の引率ができないため	15.4	17.7
指導者研修を実施する体制が整っていないため	13.4	13.3
部活動指導員を配置しているため	6.2	8.1
地域の団体と連携した活動ができるため	1.5	1.3
その他	29.8	25.5
無回答・無効回答者数	4.3	4.3

単位%（平成 29 年度運動部活動等に関する実態調査報告書 p. 88 より）

添付資料4 愛媛県内の新たな取り組み：部活動指導員と総合型地域スポーツクラブ

1) 部活動指導員の活動状況の視察

愛媛県内では市町中学校で 43 名、県立中等前期 5 名、県立学校 6 名の計 54 名の部活動指導員が活動を行っている。その中で、高校 1 名、中学校 6 名の部活動を訪問し、部活動指導員と顧問にアンケート調査とインタビューを実施した。

- ・「年間 230 時間という時間の制限」 外部指導者の時には上限が無かったが、この制度になって厳しくなったと感じている。大会や練習試合の引率に行けば、すぐに限度になってしまう。1 回を 2 時間で計算しているが、試合を引率すると 6 時間程度になる。平日の練習を見ることが出来ない計算になる。
- ・「鍵の問題」 部室や器具庫の鍵は主に職員室にある。単独での指導（顧問は休み）の場合、他の先生が学校に来ていないと開けられない。午前中の練習だったが、職員が誰も登校しなかったため、トレーニングのみでその日の練習は終わった。管理職と話し合い、後日、部室の合鍵を作製し渡した。
- ・「仕事との関連」 部活動の時間に勤務時間を合わせるなど、会社に迷惑をかける部分もある。部活動指導員の方の勤務時間での問題も注意が必要。具体的には、金曜日の放課後に部活動の指導を行った後に夜勤の仕事を行い、明けた土曜日の大会へ引率を行ったため、連続勤務を職場から指摘され、問題になったことがある。
- ・地域の方だからこそこできる活動のバリエーションが増え、地域の活動に参加する機会が多くなった。具体的には、地域のバトミントクラブから古くなったシャトルを譲り受け、雨天時のバッティング練習に使用したり、会社の廃材を利用して自作のバットの作成（マイバットを自作することで自宅でのスイングなどの自主練習の意識が高まった）をしたり、新たな活動が増えた。また、地域のマラソン大会にも参加するなど、地域の活動に積極的に参加するようになり、良い面が多く見られた。
- ・顧問の指導する時間の負担は軽減されたが、新たに提出しなければならない関係書類が多い。関係書類は全て顧問の元に届くため、資料作成は顧問が作成。負担を感じる。

活動を訪問すると、どの学校でも活発な活動はされていた。技術指導（事故防止へのマネジメントも含む）がしっかりされており、教師側の負担も少なくなり、本来の目的

が反映された活動になっていると感じた。しかし、今後発展するかどうかは、これも財政の問題がある。現在は費用の 1/3 を国が負担しているが、いつまで続けられるのか不透明であり、無くなった場合に地方自治体が全てを担うことになる。そうなると地域格差を生み、継続した活動ができなくなる。また、人材の確保も問題であり、現在は元教員、元外部指導者か元保護者が務められており、新規で登録された方はいなかった。どのように公募をかけ人材を確保するのも、解決していくべき課題である。

2) 総合型地域スポーツクラブ

愛媛県下には 32 の総合型地域スポーツクラブがある。その中で中学校の部活動と連携を取って活動しているクラブは「ONO スポーツクラブ（松山市）」が唯一のクラブである。また、今後、連携を取って活動を模索しているのが「NPO 法人今治しまなみスポーツクラブ（今治市）」である。この 2 つのクラブのマネジャーにインタビューを行った。

① ONO スポーツクラブ（松山市）

「部活動でカバーできないところを、社会体育として地域で補っていきこうと発足した」と公言しているように、地域の中学校の活動を支える活動を行っている。現在は、男子バスケットボール部・女子バレー部・野球部・硬式テニス部を開設し、学校の部活動と連携を取り、放課後や休日に活動を行っている。学校と何度も会議を開いてルールを決め、問題が起きればすぐに話し合いを行い改善していくなど、理想的な活動が行われている。硬式テニス部については、ニーズがあったが中学校が部活動の数を増やすことはできないとの判断から、スポーツクラブで部活動を立ち上げ、中学校の部活動として認めてもらい大会にも参加している。

- ・男子バスケットボール部・女子バレー部は週に 2 回、夜間に活動を行っている。

○～18:00 部活動（小野中体育館）

○下校。自宅で夕食を取り、再び学校へ（希望者のみ）

○19:00～ スポーツクラブ（小野中体育館）

【夕食の時間を設けるメリット】

- ・希望しない生徒が抜けやすい
- ・適切な時間に食事を入れることは、栄養面においては良いことである

【夕食の時間を設けるデメリット】

- ・連続して活動した方が効率的（1 回荷物を片付けモップもかけるが、1 時間後にはその荷物を再び出して活動することに違和感を覚える）
- ・教員の負担減が主の目的ではない。参加したい教員も参加できない状況はおかしい。

- ・軟式野球部

○現在は、学校の部活動が休みの休日（土・日・祝日）で実施。1 ヶ月のうち活動は 3 日程度（半日）。地域の指導者 3 名で実施。学校と連携し、テスト期間などは実施しない

○任意の活動。やりたい子どもが一人でもいたら、その活動場所を提供している。

○スポーツクラブが運営する企画も多数行っている。

- ・野球人口を増やすことを目的に、園児や小学生低学年を対象とした T ボールの会を中体連や高野連と協力し実施。
- ・県外の強豪校を地域の施設で受け入れて、スポーツクラブが運営する大会を実施。交流を深め、競技力向上にも尽力してきた。

② NPO 法人今治しまなみスポーツクラブ（今治市）

同クラブは今治市陸地部にある 37 のスポーツ施設の指定管理を受託しており、各地の主要スポーツ施設を会場に、通年と短期（約 3 か月，10 回）の約 60 教室を開講している。その施設を利用して、現在のところは中学校の部活動と連携した活動ができないが、スポーツクラブと市の教育委員会とで協議を行っている。現在はどのような形の活動ができるか話し合っている段階である。

1 つの可能性として次のような提案をさせていただいた。トレーニングの日を決めて、近隣の A 中，B 中，C 中の同じ競技の運動部活動生が集まりスポーツクラブで活動する。複数の学校が集まることで競争意識が高まり効果的な活動になるとともに，交流も深まるというメリットも生まれる。活動内容はストレッチ，自重のトレーニング，理学療法士や栄養士による勉強会などスポーツクラブが既存しているノウハウを生かして指導することができる。また，他の部活動と連携して企画運営すると，グラウンド全面使用の安全な状況下で実践練習ができるなど曜日ごとにメリハリのついた活動ができるメリットも生まれる。

【活動例】	月	火	水	木	金
野球部	練習	トレーニング (スポーツクラブ)	休み	練習 (グラウンド全面)	練習
サッカー部	練習	練習 (グラウンド全面)	休み	トレーニング (スポーツクラブ)	練習